

水辺環境マップ 作成マニュアル

ー水辺環境マップ作成活用マニュアルー

平成20年1月

著作：名古屋市水辺研究会代表 國村恵子

発行：愛知県環境部水地盤環境課

目次

1. はじめに	p. 1
2. マップ作りの手順と活用	p. 2
3. 観察・調査コースの選定方法	p. 3
4. 水辺環境調査に適したポイントの選定方法	p. 4
5. 調査時の留意事項	p. 5
6. プログラム	p. 6
[プログラム1] 香流川の生きものしらべ =初級編=	
[プログラム2] 香流川の生きものしらべ =通年編=	
[プログラム3] 香流川の生きものしらべ =自然観察編=	
[プログラム4] 香流川の生きものしらべ =植物観察編=	
[プログラム5] 香流川の生きものしらべ =水生昆虫編=	
[プログラム6] 香流川の生きものしらべ =野鳥観察編=	
[プログラム7] 香流川を旅してみよう	
[プログラム8] 川や海をもっときれいに・下水を学ぼう	
7. 水辺環境マップの事例	p. 14

1. はじめに

わたしたちが暮らしている地域を流れる川沿いを歩いたり、流域内のさまざまな情報を集めて、水辺環境マップを作ってみましょう。

普段なにげなく見ている川が、わたしたちの日常生活に深くかかわっていることや、水辺の魅力を再発見することが、このマップ作成のねらいです。身近な川の源流や下流までを、線として知るだけでなく、流域全体の土地利用形態や水利用のあり方を知ること、水循環の仕組みが、体験的に理解できるようになります。

川の流路延長が長い場合や、流域面積が広い場合は、奥山・山林地域、里山・農村地域、都市・住宅地域、干潟・海岸地域など、それぞれが持つ、水循環システムの現状と課題を、ある程度導き出すことも可能です。

また、水辺環境に関するさまざまな情報を収集する過程で、流域市民、行政、産業、自然、歴史、文化、教育など、多様な情報ネットワークが広がり、構築されます。それらを通じて、流域の水環境の健全化に向けて、何をどうすればよいのか、次のアクション・プランや活動への発展に結びついていくのではないのでしょうか。

その第一歩は、まず、長い歳月をかけて、地域を流れ続けてきた川とその水辺環境を知ることです。

さて、では何から始めればよいのでしょうか。

実践例としてのプログラムを香流川を例に、この冊子では紹介しました。それらのプログラムは、愛知県内の川なら、ほぼどの川でも応用できますので、学校や地域、企業やNPOなどで実際に取り組んでみてください。

2. マップ作りの手順と活用

①
↓

まず、マップに収録する内容を決めます。
調査の実践例として紹介したプログラム1～8（p.6-p.13）より得られる情報や、支流、ため池、橋、道路、線路、シンボルとなる建物や施設、川沿いにある小学校などの教育機関、歴史や文化、未来に残しておきたい風景や地域遺産など、さまざまなテーマやモチーフを収録するのか、テーマを絞り込むのかを、みんなで話し合ってください。
参考…文献や資料、人からの聞き取りなどの調査を含めたり、情報を持ち寄ってから収録する内容を決めてもいいでしょう。

②
↓

地域を流れる川の流域の地図を準備します。地図は国土地理院発行の2万5千分の1図、都市地図などを準備し、作成するマップの対象範囲を決めましょう。
香流川のように流路延長15km程度であれば、全川を対象にできますが、木曽川、庄内川、矢作川、豊川のように大きな川は対象範囲を絞りましょう。
参考…愛知県環境部水地盤環境課作成『水循環再生指標調査マニュアル』（平成19年7月）を参照してください。

③
↓

地域を流れる川で、プログラム1～8を実施してみましょう。
調査にあたっては、3.観察・調査コースの選定方法（p.3）や、4.水辺環境調査に適したポイントの選定方法（p.4）、5.調査時の留意事項（p.5）を参照してください。

④
↓

マップに①、②、③の情報を書き込んでみます。イラストや写真での掲載方法も工夫します。

⑤

ある程度完成したマップを用いて、実際に歩いたり観察したり、第三者に試験的にマップを用いてもらったりして、修正し完成させます。

マップは、川歩きマップ、川遊びマップ、野生生物情報マップ、〇〇川流域の歴史散歩、湧水・井戸水マップ、水質マップ、〇〇川流域のイベント情報などとして、テーマ別に編集して活用することもできます。また、マップは、作成した人には、その過程で水辺環境の現状や課題が理解できますが、第三者にそれらが伝わるかがマップ作りのねらいでもあり、楽しみでもあります。地域における小さな川の水循環を知ることは、愛知県をはじめ、わが国における森、里、まち、川、海の大きな水循環を知るきっかけとなります。あなたも、ぜひ、水辺環境マップをみなさんとともに作ってみてください。

３．観察・調査コースの選定方法

小学校の場合は、校区に川があれば、その川を、ない場合は移動上安全度が高い川を選びましょう。企業（農林水産業や各種製造業を含む）の場合は、利用した水の排水水域や企業とかかわる地域の川を選びます。ＮＰＯや地域団体などがマップ作成を目的に川を選定する場合は、テーマを決めてから選んでみましょう。

対象河川や水辺環境調査に適したポイントの選定方法は、歩いて行くことができる範囲とします。学校・企業・地域・ＮＰＯなどで実施する場合も、参加者数は最低１０人から６０人程度を見込むとすれば、車での移動は難しいでしょう。ただし、移動に公共交通機関を利用すれば、行動範囲はかなり広がります。源流や河口などへ行く場合は適宜、交通機関を利用しましょう。

学校が近い場合はトイレや観察後の手洗いの場所などの心配はありませんが、それ以外の場合は、川沿いにトイレのある公園や公共施設があるポイントを選びましょう。

対象河川を何回かに分けて、観察したり調査したりする場合は、上流や水源から、下流や河口へ向かうコースやその逆のコースを設定します。森・里・まち・川・海の水循環を知る上では、自然な水の流れに沿うことが大切です。

わたしたちの暮らしの中の水循環を知る上で、下水処理場もコースに含むようにしましょう。

4. 水辺環境調査に適したポイントの選定方法

川に入りやすいポイントは、水深が 30cm 程度で、流速も 30cm/秒程度が最適です。流速が速い場所や淵などの深い場所は避けましょう。河川形状は水際がコンクリートなどで固められた直線河道よりも、水際に凹凸があり、抽水植物が生育し、河床に頭大の石がある場所や、瀬と淵が連続するなど形状が多様であればあるほど、生物も豊富です。それから河川形状によっても、川から得られる情報量は随分差がありますので、比べてみてください。

都市や住宅地域では治水安全度を高めるため、垂直になったコンクリート護岸が施工され、川に直接降りることができる場所が限られています。川に入らなければ、水辺環境を知ることはできませんので、川に入れる場所を事前に下見をしておくことも必要です。

また、マップ作りの過程で、川を歩きながら川に降りられる場所を探して、記入していくことも大切な作業です。

さらに、「この場所に降りることができたら…」という場合、流域全体のマップを作って、河川管理者に相談してみてもいいですね。五条川、八田川、生地川、内津川、矢田川、香流川、天白川、矢作川、野田川、大入川、朝倉川など、愛知県内では各河川で階段整備や多自然川づくりが施工され、少しずつ川に近付けるようになっています。

対象河川では、源流のきれいな川や下流の汚れた川にも入ってみましょう。水生生物、淡水魚、甲殻類など、水質によって違う種類を観察することはマップの情報量を豊かにします。

5. 調査時の留意事項

マップ作成にあたり、地図を準備しますが、昔の地図がある場合は、現在の地図と見比べて、川の流れ方や川幅が変化している場所を選んでみましょう。昔の川の写真や風景を知り、河川改修工事が施工される前や川の水がきれいだった頃、川に生息していた生物、河原や河畔林を含めて生息や生育していた動植物を調べます。地元の人が泳いだり川遊びをした経験があるか、川で野菜や農具を洗ったり、水田やものづくりへの水利用の有無など、地域で川をよく知る人に聞き取りを行います。

また、情報提供など、協力してくれた人に、採集した生物の情報や完成した水辺マップを送るなど、情報のネットワーク化を図りましょう。川が変化した理由を知ること大切です。

都市河川や汚れた川、水源のため池などでは、外来生物が繁茂し繁殖するようになりました。その川本来の生態系を復元するためにも、観察や調査で外来生物を採集したり観察した場合は、必ず記録し、マップにも記入するようにしましょう。

愛知県内の河川などでは特に、次の種が水辺生態系を攪乱し、悪影響を及ぼしています。

＊淡水魚

オオクチバス、コクチバス、ブルーギル、カダヤシ、グッピー、ティラピア類

＊両生類・爬虫類

ウシガエル、カミツキガメ、ミシシippieアカミミガメ

＊貝類

スクミリンゴガイ、カワヒバリガイ

＊哺乳類

アライグマ、ヌートリア

＊植物

アレチウリ、クワモドキ、ハリエンジュ、オオフサモ、オオカナダモ、コカナダモ、ホテイアオイ

マップには、それぞれわかりやすいポイントからポイントまでのコースタイムを記入するのもよいでしょう。また、調査や観察を行う過程で撮影した写真や、スケッチしたイラストをマップに活用します。イラストは油性ペンなど、水に濡れてもにじまないものを用います。

水質、流量、水深、水辺などの調査方法については、愛知県環境部水地盤環境課作成『水循環再生指標調査マニュアル』（平成 19 年 7 月）が参考になります。

6. プログラム

[プログラム1] **香流川の生きものしらべ** =初級編=

実施場所	河口部ふれあい橋、久留里・神の木・香月人道橋、石田橋、東島橋
ね ら い	香流川の流域にどのような生きものがあるかを知る基本プログラムです。まず、川に入って川に親しみ、川遊びから始めましょう。
実施時期	春から初夏 3月下旬～5月 梅雨明けから夏 7月下旬～9月中旬 晩夏から秋 9月中旬～11月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 川に入る前に流れが速い場所や水深がある場所へは行かないように注意する。はじめにゴミを拾ってから生物の採集をする。 ② 魚、エビやカニ、トンボのヤゴなどがあるポイントと、どうしたら採集できるかというコツを教える。タモの使い方を教える。 ③ 各自、採集した生きものをビニール袋やバケツに入れて移動する。 ④ 採集したものを集め、大きめの水槽やケースに入れて観察する。 ⑤ 何がどのくらいいたかを数えて、記録する。 ⑥ パックテストで水質を調べる。水深や水温を計る。 ⑦ 水質階級の生きものを調べて記録する。
用意する物	パックテスト（pH・COD）、ピンセット、ルーペ、ゴミ袋、柄の長いタモ、白いトレイ、紙コップ、時計、 小さいタモ（採集生物を水槽に入れたり分類するのに便利）、水槽、温度計、バケツ、ビニール袋、図鑑、記録用紙、定規、濡れてもよい服装と着替え、滑りにくい靴・長靴、帽子、飲み物
注意事項	川の中はヌルヌルとしてすべりやすい場所もあるので転ばないように注意する。熱中症や日射病にならないよう適度に水分補給をする。 深いところや流れが速い場所へは行かない。一人だけ離れて上流や下流に勝手に行かないようにする。裸足で入らない。
学びの視点	採集した生きものはどんな場所にいたかを発表する。石の裏、砂地、草の根元、少し深い所、流れのない所など川でもそれぞれ住む場所が違うことに気付かせる。生きものどうしのつながりを絵で描いてみると全体がつかめる。（水辺生態系）

[プログラム2] **香流川の生きものしらべ** =通年編=

実施場所	河口部ふれあい橋、久留里・神の木・香月人道橋、石田橋、東島橋
ね ら い	香流川流域の水生生物、淡水魚、水質、流量、川の形、季節による変化を正しく理解する。
実施時期	春から初夏 3月下旬～5月下旬 梅雨明けから夏 7月下旬～9月中旬 晩夏から秋 9月中旬～11月 冬 12月～2月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 採集した生物を水槽や分類ケースに入れて記録する。 ② パックテストで水質を調べる。水温、水深、流速を計る。 ③ 水質階級の生きものを調べて記録する。 ④ 春・夏・秋・冬と季節ごとに同一地点で調べる。 ⑤ 季節によって調べた生きものの種類や数の違いを話し合う。 ⑥ 同じ種類の魚でも稚魚、幼魚、成魚、雄雌の違いを知る。 ⑦ 季節によって調べた水質、水温、流量、川岸の植物の生育状態の違いを知る。観察できる野鳥も違うことを知る。干潮満潮を知る。 ⑧ 一年間の調査結果をまとめてグループ別に発表する。
用意する物	パックテスト（pH・COD）、ピンセット、ルーペ、ゴミ袋、柄の長いタモ、白いトレイ、紙コップ、時計、 小さいタモ（採集生物を水槽に入れたり分類するのに便利）、水槽、温度計、バケツ、ビニール袋、図鑑、記録用紙、定規、濡れてもよい服装と着替え、滑りにくい靴・長靴、帽子、飲み物
注意事項	川の中はヌルヌルとしてすべりやすい場所もあるので転ばないように注意する。熱中症や日射病にならないよう適度に水分補給をする。 深いところや流れが速い場所へはいかない。冬は水温も低く風もあるので長靴を履き、保温に努め風邪を引かないようにする。
学びの視点	一年を通じてほぼ同じ川で水生生物調査をすることは、川に親しむとともに季節変化を動植物全般から知ることになり、生きもののつながりや生態系を『川遊び』を通じて体験的に学び取ることになる。

[プログラム3] **香流川の生きものしらべ** =自然観察編=

実施場所	香流川の水辺や周辺の緑地・公園・里山
ね ら い	香流川の水辺や周辺の緑地・公園における動植物の観察を通して、川が自然環境にはたす役割や機能を正しく理解する。
実施時期	春から初夏 3月下旬～5月下旬 梅雨明けから夏 7月下旬～9月中旬 晩夏から秋 9月中旬～11月 冬 12月～2月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 春に香流川と緑地で植物、昆虫、水生生物、野鳥などを観察する。 ② 春・夏・秋・冬と季節ごとに同一フィールドや学校等から同じコースを歩いて何かシンボルになる木、風景などを決める。 ③ 季節によって観察した動植物の種類の違いを記録する。 ④ 観察記録や絵を書き、野鳥と魚、植物と昆虫のつながりを知る。 ⑤ 室内学習では観察した動植物をパソコンや図鑑を活用して調べる。 ⑥ 学校等から毎回往復するコースを決めて、動植物の変化を見る。 ⑦ 学校祭等で父兄や地域住民をネイチャーウォッチング等で案内し、学習の成果を地域に還元する。
用意する物	タモ、図鑑、記録用紙、地図、双眼鏡、校区や地域の詳しい地図 香流川水辺マップをテキストにする。 歩きやすい服装、運動靴、帽子、飲み物
注意事項	夏から秋は、かぶれの木に注意し、ハチさされにも注意する。 熱中症や日射病にならないよう適度に水分補給をする。 生きものを観察する時は驚かさないようにする。
学びの視点	一年を通じ同じフィールドで自然観察を行うことによって、さまざまな興味を引き出し四季の自然の変化を動植物全般から知ることになり、生きもののつながりや雑木林、緑地、池、湿地や香流川とのかかわりを学ぶことになる。

[プログラム 4] **香流川の生きものしらべ** =植物観察編=

実施場所	香流川全域と川沿いの公園、緑地、校庭など
ね ら い	一年を通じて同じフィールドで植物観察することで自然の変化を植物全般から学び、生きもののつながりや香流川とのかかわりを学ぶ。
実施時期	春から初夏 3月～5月 梅雨明けから夏 7月下旬～9月 晩夏から秋 9月中旬～11月 初冬から早春 12月～2月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 川沿いで春に咲く樹木や野草を観察する ② 川沿いで夏に咲く樹木や野草を観察する。 ③ 川沿いで秋に咲く樹木や野草、実のなる木や草を観察する。 ④ 川沿いで冬に咲く樹木や野草、実のなる木や冬芽を観察する。 ⑤ 私の木など、シンボルツリーを決めて一年間観察し記録する。 ⑥ 植物と昆虫や野鳥とのかかわりを知る。 ⑦ 展開例…タンポポの在来種と外来種の川沿いの分布図を作る。 ⑧ 植物のある川とない川で生息している生きものが違うことを知る。 ⑨ 香流川の植物マップを作成する。 ⑩ 香流川と植物とのかかわりをまとめる。
参考事項	もともと日本にあった在来種と外国から入ってきた帰化植物や特定外来種がある。アレチウリ、オオキンケイギク、オオカナダモなどの分布域を記録するとともに、セイタカアワダチソウやセイヨウタンポポの分布にも注意する。標本作製する場合は新聞紙にはさんで家庭や学校に持ち帰り標本にする。香流川の水中、水際、川の土手、道沿いには 200 種類以上の植物が生育する。
用意する物	記録用紙、スケッチブック、図鑑、新聞、ビニール袋、カメラ
注意事項	花粉症の子供に配慮する。(ブタクサ、カモガヤ、ヨモギなど)
学びの視点	植物観察そのものとしても学べるが、川の生きものや風景、植物と川のまわりの生きものやわたしたちのくらしとのかかわりを学ぶ。

[プログラム5] **香流川の生きものしらべ** =水生昆虫編=

実施場所	香流川全域、川岸や植物のある場所、川沿いの公園、緑地など
ね ら い	川の中で幼虫時代をすごしている水生昆虫も羽化し成虫になり川岸や近くの緑地で成長するので、命のいとなみと川との関係を学ぶ。
実施時期	春から初夏 3月下旬～5月下旬 梅雨明けから夏 7月下旬～9月上旬 晩夏から秋 9月中旬～11月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 川の中で水生生物の採集を行う。特にトンボのヤゴ、カゲロウ、カワゲラ、トビケラ等を、種類ごとにわけて数を記録する。 ② 採集した幼虫が、いつごろ成虫になるか調べる。 ③ トンボの羽化のぬけがらを集める。ヤゴは持ち帰り学校の水槽で飼育し、羽化を観察してもよい。 ④ 幼虫時代と成虫時代の、えさや環境の違いを知る。 ⑤ 成虫が産卵する時期を調べ、可能であれば観察する。 ⑥ どのようなヤゴ、カゲロウなどの底生生物がいるかで水質もわかるので記録しておく。 ⑦ 一年間、香流川の水辺、水際で観察した虫マップを作成する。 ⑧ トンボはヤゴと成虫の両方を絵や写真で並べてわかりやすくする。 ⑨ 学校のプールにもトンボのヤゴがいるので6月に掃除する前に調べる。(ただし9月に薬品を投入していないプール)
用意する物	網目の細かいタモ、ビニール袋、フィルムケース（ヤゴやぬけがらを入れるのに便利）、記録用紙、スケッチブック、歩きやすい服装と運動靴、帽子、水中メガネ
注意事項	ヤゴの大きさは季節によって違うので水生昆虫図鑑で見分ける。石の裏や草の根元にいるので、ゆっくり時間をかけて多種類を採集する。
学びの視点	川や水辺には魚以外にもさまざまな生きものがあることを知り、つながりや生態系、水質などを学ぶ。

[プログラム6] **香流川の生きものしらべ** =野鳥観察編=

実施場所	香流川および隣接する公園や緑地帯
ね ら い	香流川の水辺にいる野鳥のようすを観察し、えさは何か、繁殖はどこかなど野鳥を通して川の周辺の環境を理解する。
実施時期	春から初夏 3月下旬～5月下旬 梅雨明けから夏 7月下旬～9月上旬 晩夏から秋 9月中旬～11月 冬 11月～3月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 川岸から川全体を見る。 ② 水の中、水際、川沿いの木など、どこにどのような野鳥がいるかグループに分かれて探す。 ③ グループごとに見つけた野鳥が何をしていたか記録する。 ④ 記録したものを持ち寄り、一枚の絵や記録用紙に書く。 ⑤ 春夏秋冬、種類が入れ替わるのでその特徴をつかむ。子育てする鳥のえさや、冬ならモズのはやにえ探し等も楽しめる。 ⑥ グループは通年観察の場合、同じコースを担当する。 ⑦ 一年間の野鳥のようすや種類、数量などをまとめる。
参考事項	カワラヒワなら草の種子、カモ類なら水草や藻、セキレイなら小さな昆虫、ツバメが川面を低く飛んでいる時は羽化した底生生物、サギ類ならエビや魚、カワセミなら小魚というようにえさになるものがあります。何を採餌しているか、よく観察する。
用意する物	図鑑、双眼鏡、フィールドスコープ、記録用紙
注意事項	野鳥観察では、まず、大勢でわいわいさわいで水辺に行くと、それだけで野鳥は驚いて逃げてしまいます。川に近くなったら、静かにそっと歩いて行き、川のまわりを見てください。公園や緑地では、鳴き声のする方向を探してみましょう。
学びの視点	野鳥を通して、川の水質、水深、流量、えさとなる動植物の有無、川や水辺の周辺の環境を知り、学ぶきっかけになります。 生きものどうしのつながりを絵で描いてみると全体がつかめます。

実施場所	香流川全域 源流から河口まで
ね ら い	香流川を水源から河口まで調べ、それぞれの場所の動植物、水質、水深、川の形などを流域全体から正しく理解する。
実施時期	春から初夏 3月～5月 梅雨明けから夏 7月下旬～9月上旬 晩夏から秋 9月中旬～11月
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① 春に源流の愛・地球博記念公園、砂防公園、明德池などのため池を訪ね、水源涵養林やため池の役割を学ぶ。動植物の自然観察を行う。 ② 砂防池やため池の役割を知る。 ③ 昔の川筋と今の違いを知り、まちの変化を学ぶ。 ④ 支流の池や里山、湿地などを訪ね、その役割を学ぶ。 ⑤ 河口部ふれあい橋、久留里・神の木・香月人道橋、石田橋、東島橋などで、生物採集を実施する。 ⑥ 上流・中流・下流と、生物や川のような違いを知る。 ⑦ 下水処理場を見学し、くらしと川とのつながりを学ぶ。 ⑧ 河口の矢田川合流点を訪ね、海へと流れていくことを知る。
用意する物	地図は昔の地図と現在の地図を用意する。 動植物は季節や場所によって随分違うので図鑑があると便利。 双眼鏡、パックテスト、記録用紙、スケッチブック、歩きやすい服装と運動靴、帽子、飲み物など
注意事項	雑木林にはかぶれやすい木のヤマウルシやヤマハゼなどがあるので梅雨や夏の季節には注意する。池の深い場所には入らない。 香流川は川沿いに歩ける道が整備され歩きやすいが、交差点では車に注意する。
学びの視点	川を水源、源流から河口まで全体を通して学ぶことは、川に親しむとともに流域全体で香流川を知ることになり、自分たちが住んでる地域の昔と今を知る上でも学ぶことが多い。

[プログラム8]

川や海をもっときれいに・下水を学ぼう

実施場所	長久手浄化センター（下水処理場）
ね ら い	魚、水生昆虫、甲殻類など多様な生物が生息できる水辺環境とするために、汚れの原因を知り、下水道のしくみを学び理解する。
実施時期	いつでも。 ただし、川で生きもの観察や水質調査の実施後に見学の方が、学習効果は上がる。
対象・人員	小学生3年生以上から、中高大学生や大人まで 20人から60人
内容・展開	① はじめに下水・汚泥に詳しい担当者から説明を聞く。 ② わたしたちが流している台所や浴室の排水が下水処理場に集められ、処理されていることを学ぶ。 ③ 処理の様子と香流川へ排水されるまでを見学する。 ④ 汚泥処理のしくみと再利用の種類を見学する。 ⑤ 下水処理場の歴史と香流川の水質の変遷について学ぶ。 ⑥ 下水の合流式と分流式、高度処理について学ぶ。 ⑦ 愛知県や名古屋市の下水道科学館へ見学に行く。 ⑧ 学校内の排水溝と下水への流れを追跡し調べる。 ⑨ 教室で水質実験をする。魚が生息できる水質を知る。 ⑩ 香流川で生物観察と水質調査を行い、水循環を体験的に学ぶ。
用意する物	記録用紙、カメラ、その他（他のプログラム参照）
注意事項	特になし。
学びの視点	下水道のしくみ、汚泥処理のしくみを知ること、わたしたちが、毎日使っては流している汚水が、生きもののいる川や海を汚していることを学び、汚さず流す生活習慣を身につける。今日から実行できることを具体的に理解し川や海をきれいにする意識を育てる。

7. 水辺環境マップの事例

愛知県、企業、NPOなどが主催する研修会で、参加者のみなさんに、1.昔の川と今の川、2.生態系、水質、流量、川の形、3.水源の森と海・流域で考える、4.川への思い、の4つのキーワードで水辺環境マップを作成していただきました。主な意見を紹介しますので参考にしてください。その他、五条川、碑田川、坂宇場川などで作成しています。

- 境川…昔はシジミが採れ、潮汐の影響が町なかでも見られた。きれいな川にしたい。
- 矢作川…川のもともとの形を残して工事しているので生物が多い。川の両岸に樹木が多いのを未来に残したい。一時農薬やダムで川が汚れた。
- 大山川…ヨシがなくなった。流域の圃場整備で生物が減った。情緒のある川にしたい。
- 梅田川…工業誘致で井戸水が枯渇し川の汚濁が進んだ。蛍がいた昔のきれいな川に戻す。
- 木曽川…昔はシジミ、ウナギ、ナマズ、ハエ、ボラが採れ、食べていた。昔は川は泳ぐ所で、祖父江ではギンナンを川で洗っていた。ダムができ経済は活性化したが、失ったものも多い。木曽川を知り、その恵みに感謝する人が少なすぎる。
- 庄内川…陶磁器産業で白濁した川。昔は川で遊ぶ子がいたが、今はいない。河川敷にゴルフ場や野球場があり河口にボールのゴミが多い。製紙工場の排水改善を願う。漁協がなくなった。志段味地区500haで丘陵地や水田が消失した。見た目きれいでも食べられる魚がいらない。自然な川岸を残し、生きものがいっぱいいる川にしたい。(八田川、内津川、水野川、新地蔵川、到来川、堀川を含む)
- 瀬戸川…白濁した川、今も生活排水が流れている。治水のための改修工事で水際が単調で生物が育ちにくく、護岸も作り過ぎか殺風景。子供が遊べる川にしたい。
- 香流川…鯉、亀、コサギが多い。暮らしの中でできることを、まず大人から実践。
- 矢田川…汚濁要因は企業が排水規制を守らないから。海上の森が残ってよかった。開発されたら、もっと汚れた川になった。森から流れる水はきれいで山口川の汚れを希釈している。食べ残さず油を流さずなど、今できることから始めよう。
- 山崎川…農業用ため池が水源で畑の中を流れる川だった。農業を止め水を使わなくなった。瑞穂グラウンドの横はボートを浮かべて遊べる所だった。猫ヶ洞通りは昭和50年初め暗渠になった。昭和30年前半までは魚が多く子供は川で遊ぶのが当たり前の地域だった。30年後半は生活排水で汚れた。流域に多くあった池や水田が埋められ雨で川が溢れるようになった。再び子供が遊べる美しい川をめざしたい。
- 天白川…昔は泳げた。家はなく田畑ばかり。採集したタニシ、鯉、魚は何でも食べた。シジミがいて蛍が乱舞して、いつも田に水があった。今はコンクリートで固められた。昔は水量が多かった。東部丘陵地帯の水源林保護を。我々今は60代の世代が今のような酷い川を求め許したことを反省し、子供に遊べる川を残そう。
- 扇川…コンクリート護岸で川に降りる場所が皆無、眺めるしかない。ジュズダムを自由にとることも不可能。ため池を埋め、宅地化され湧水が涸れた。有松絞りの歴史と川。昔は湧水が多かった。新海池・水広下池等池が多かった。森が消え水も涸れた。まずコンクリートを剥がして浄化能力が高い自然の川に戻す。ボランティア精神を持って親しみの持てる川にしていこう。